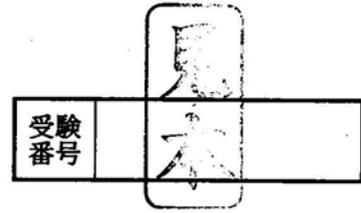


'13

前期日程



## 文化・社会系共通 小論文問題

(教育学部)

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題に落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 解答は指定の答案用紙に記入してください。
4. 答案用紙は持ち帰ってはいけません。
5. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。
6. 時間は 60 分です。

◇M16(707—93)

## 問 題

以下の文は、「義務教育に留年は必要か」という問いかけに対する A 氏・B 氏の意見である。これらを読み、問に答えなさい。

A 氏

子どもが授業を理解しながら進むことが大切で、その「一つの手段」として、留年という姿があってもいいと思います。

30 年ほど前に米国に勤務していた時、公立小に通っていた娘が進級時、「友達ももう 1 回同じ学年をやるんだって」と言う。「思い切ったことをするんですね。日本だと親が怒鳴り込んで来ますよ」と先生に言ったら、真面目な顔でこう答えられました。「そんなことはありません。本人も親も理解しています。その子のためを考えた措置で、最良の手段と考えました」。率直に驚きました。

たとえば、小学校 5 年で算数の授業がわからなくなった場合、学年が進んでもその状態が続く。わからない授業を受け続けるほど苦痛はない。不登校や、学ぶこと自体が嫌いになることにつながる。

私が文部大臣の時に、習熟度別学習というのをかなり強調しました。1 学年 3 クラスのところ、習熟度別に 5 クラスにわければ、より個に応じた指導ができます。その子その子に合った指導をできるだけ目指した上での、選択肢の一つが留年。出来が悪いから自動的に、という単純な話ではありません。

私は「機会の平等」は大事だけど「結果の平等」まで求めるのは、人間社会ではあり得ないことだと思います。「徒競走をさせない」というのが一番わかりやすい悪平等の例ですが、その最たるものが自動的に進級させる「学年信仰」です。そもそも留年は、現行法で認められているのに、「成績が悪くても進級させることが形の上での平等になる」との考え方によって選択肢から排除され、運用されてこなかったのです。

運用するとしたら、出席日数や成績に加え本人の性格や今後の発展性を踏まえた上で、担任や校長が判断し、親と本人に話す、という手順を踏む形だと思います。

B 氏

「小中学校での留年の実施」を主張している人は、子どもの低学力の背景に貧困の問題が横たわっている現実への認識が足りないのではないかと思います。

私は、ある県立高校で教諭をしていた当時、有名大合格者数を競うような高校には潤沢な予算が配分される一方で、「底辺校」と呼ばれる高校はあまり配慮されない実態に矛盾を感じ、高校間格差の問題の調査・研究を始めました。掛け算の「九九」も言えない、アルファベットも書けないといった低学力の生徒が多くいる底辺校こそ、彼らの学び直しのために手厚い支援が必要なのに、実態は逆で、底辺校の生徒は教育行政から見捨てられた存在でした。

底辺校を中退した若者の話を聞いて感じるのは低学力と貧困の連鎖の強さです。

かつて、ある県の県立高校を学力別に五つにグループ分けし、授業料減免率と中退率を調べたところ、低学力の生徒の割合が多い学校群ほど、中退率も高く、家庭の貧困度を表す授業料減免率も増加。低学力や高校中退と家庭の貧困との関連がデータでも確認できました。

欧州とは違って、学び直しの場がない日本の小中学校で、低学力の子どもを留年させるということは、その子は学校から排除されることになりますから、そのまま不就学→底辺校に進学→高校中退→非正規雇用→生活保護という道筋が明らかです。

今でさえ、国が生活保護費に3兆円もの税金を投入しているのに、小中学校で留年を実施すれば、新たな「生活保護予備軍」を大量に生み出すことになります。同じ税金を使うにしても、小中学校でつまづいた子どもの学び直しのために税金を使ったほうが有効だし少額ですみます。放課後の学校などを利用し、地域の大人がボランティアで教えれば、地域づくりにもなります。

【『朝日新聞』2012年5月8日】

(出題の都合上、一部省略し、表記等を改めた。)

朝日新聞無断転載禁止

問

「義務教育に留年は必要か」の問いかけについて、A氏・B氏双方の主張をふまえた上で、あなた自身の考えを述べなさい。(600字以内)